民俗学

６．５　とむらうアンケート抄

Facebook「とある民俗学講師の補足メモ」

・長いプロセス：通夜、葬式、出棺、埋葬／位牌・仏壇、月命日、彼岸、盆、年忌供養、弔い上げ…

・葬送の前近代：コミュニティに支えられた葬式仏教が基調（神葬祭は近代から）

・葬送の近現代：高度成長期（葬送の脱コミュニティ化）とバブル期以後（主体と手法の多様化）→「終活」の時代

［通夜］2016年7月、大阪市内で曽祖父の葬式が行われた。祖母、両親や従兄弟と共にお通夜のあと葬儀場に泊まり寝ずの番をしてろうそくの火を絶やさないようにした。夜中トイレに行くついでに棺桶の方に行くと、ずっと祖母が曽祖父の隣に寄り添っていたのを鮮明に覚えている。出棺の際、石原裕次郎の「わが人生に悔いなし」が流れた。

［葬儀（福岡）］2018年9月、曽祖父が103歳で亡くなり、福岡県新宮町で葬儀を行った。親族だけでなく、曽祖父とともにシベリア抑留を経験した戦友の方々も多く参列した。特に印象に残っているのは、曽祖父の棺を囲み、戦友の方々が最後のお別れをしていた姿。長い年月が経っても、同じ苦しい経験をした仲間とのつながりが続いていたことに驚いた。葬式は、故人がどのような人生を歩み、どのような人々と関わってきたのかを知る機会でもあると感じた。

［葬儀（沖縄）］2026年3月、祖父が亡くなり、沖縄県那覇市儀保の寺で一連の仏式葬儀を取り行ったのだが、そこの僧侶の話が胸糞悪かった。からだ。祖父の遺骨を納める際、いわゆる「ありがたいお話」をしだし、沖縄の先祖崇拝をディスった上で「仏教の正しい形式で死者を弔いましょう」と言い出したので、父とともに猛抗議した。彼は、私たちの祈りのあり方を否定したのだ。そんなこんなであまりスムーズに式は進まず、いろいろ考えさせられる機会となった。

［出棺］2020年6月、愛媛県今治市の平安祭典今治東セレモニー会館にて、祖母の通夜及び告別式に出席した。告別式では、出棺の際に参列者全員で棺を三回回転させた。これは「棺回し」と呼ばれる儀礼で、故人の方向感覚を意図的に狂わせて家への執着を断って無事に成仏させる意図や、住み慣れた屋敷を見納めさせる意図があるようである。

［埋葬］島根県安来市峠之内（たわのうち）では、2000年頃では土葬の風習が残っていた。父の母方の祖母の葬式では自宅で行われ、葬儀の際には、父を含む近親男性が裸足で白装束を身にまとい、棺桶を担いで自宅から墓地まで運んだ。そのまま土葬され、墓地の穴は近隣住民が協力して掘った。棺桶の蓋を閉じる際は、釘を石で打ち込んだ。こうした葬儀は親族だけでなく、地域住民全体の協力によって支えられ、自治会で葬儀の手配や役割分担の方法が決められており、近所の人々がそれに従って準備や作業を行った。さらに、菩提寺から僧侶を招いて読経をしてもらい、通夜から葬儀が終わるまでは、蝋燭の火を絶やさないように誰かが夜通し番をする「寝ずの番」も行われた。当時の葬儀には、親族や近隣住民が一体となって故人を送り出す、地域共同体の強いつながりが表れていた。

［四十九日］２年ほど前、母の叔父の四十九日を行った。母方の家系は室町幕府で知られる足利尊氏の子孫であり、故人はその当主であったため、足利将軍家の菩提所である京都市北区の等持院で法事が行われた。僧侶がお経を唱え、一人ずつ焼香し、その後、同じく京都市北区にある立命館大学の衣笠キャンパス内にある墓地に移動し、故人の遺骨を埋めた。母の家系の墓地には江戸時代のものと思われる墓石も存在し、歴史を感じた。

［納骨］祖父は2023年、長い闘病の末亡くなった。通夜や葬儀の後、火葬したが、祖母が遺骨をまだ納骨したくないと言って、しばらく祖母の家の仏壇に祀っておくこととなった。そして昨年、いざ納骨ということになり、祖父の墓がある呉市上蒲刈島に向かう日を決めた。しかし当日、警報レベルの大雨で翌日に延期。雨は３日降り続き、ここまでくると祖父が納骨を嫌がっているのであろうということで、今（2026年）も遺骨は祖母の家の仏壇に祀られている。

［天理教］我が家は代々天理教なので、お葬式も天理教で行います。仏教と異なるところは、お焼香がないことです。代わりに榊（さかき）という木の小枝を束ねた玉串（たまぐし）を用いて、作法に則り参拝します。また、お墓やお仏壇に仏花ではなく榊をお供えします。そのため、なんだかお墓が寂しい感じになります（大阪市）。

［仏壇］父方の仏壇は、父の家系が代々住んでいた京都の家にあります。今はボロボロになってしまった伝統的な町屋です。仏壇は壁に埋め込まれた形になっていて、そこにたくさんの仏像や位牌と、祖父と曽祖父の写真が一枚ずつ置かれています。今は誰も住んでおらず、定期的に親戚の誰かが様子を見に行っては手を合わせて帰るという形になっています。私は京都に下宿し始めてから様子見担当になり、祖父と曽祖父に会いに行く機会がとても多くなりました。

［お盆］毎年、夏に祖父の実家である兵庫県養父市に帰省する。祖父の両親は他界しており、実家には誰も住んでいないが、お盆に帰ってひいおじいちゃんとひいおばあちゃん、ご先祖様のお墓を掃除する。実家の周辺は私達と同じＫ姓が多く、墓地にはたくさんのＫ家のお墓がある。この集落は大屋川という川に沿って形成されているのだが、その川にお供物を流す風習がある。蓮の葉の上に刻んだ野菜やお供物のお菓子を乗せて川に流したり、川岸の石の上に供えたりする。小学生の時に川岸に点々とお供物があったことを今でも覚えている。祖父の話では、昔は家で葬式をしたが、今ではほとんどなくなっているらしい。

［清明節］毎年４月ごろの清明節には、家族と一緒にお墓参りに行きます。そのとき、浙江省杭州市富陽区の習俗によると、祖母は青団や麦餅を作ります。それから、青団や麦餅、果物などをお墓に持って行きます。中国では、このように毎年お墓参りをして、亡くなった家族を思い出します。私にとって大切な習慣です。

［改葬］父方の祖父は亡くなって40年ほど経つが、浙江省温州市にあるお墓を移動させることになった。道路建設のため、お墓の強制移動を行政から命じられたからだ。2026年8月12日、墓を移す儀式を行った。早朝に起床して、お墓に向かい、私は孫として青色の服を着た。父をはじめとした他の親族は白色の服を着た。祖父の遺骨を父と叔父が担ぎ、親族は隊列を組んで、花やらなんやらを持って歩いた。金管の音楽隊を招集し、移動中は常に賑やかな音が鳴り響いていた。１時間ほど歩き、お墓の移動が完了。驚きの多い体験となった。

［年忌］2017年、父方の曾祖母の三十三回忌が新潟県魚沼市で行われた。出席者は曾祖母の子ども７人、その配偶者たち、曾祖母の孫など15人ほど。まず自宅で菩提寺のお坊さんが１時間半ほど読経、そのあとお寺で御斎を２時間くらい行った。そのあとは参加者でホテル湯本に宿泊した。なお、ホテルへ宿泊は地域の伝統ではなく、今後このメンバーで集まることはないだろうから、せっかくだからみんなで泊まろうというという一族の考えによるらしい。

［葬祭業］母方の祖父は、2026年4月11日、山科の自宅で亡くなりました。当時、祖父と同居していた再婚相手は外出中で、死亡時に人が立ち会っていなかったため、警察で検死することとなり、13日まで遺体は山科警察署で保管されました。管理があまり良くなかったらしく、遺体が返還された時には腐敗がかなり進み、母曰く「見ていられないほどだった」。納棺師によって湯灌、納棺され、見た目も整えてもらいました。しかし14日、私が通夜で見た祖父は、生前と比べてかなり顔が膨らみ、一瞬祖父だとわかりませんでした。通夜と葬式は、セレマ山科シティーホールで、仏式で行われました。参列者は親戚と近所の方、計20名程度。叔父によると、戒名代が高かったそうです。

［墓じまい］お墓は大阪府四條畷市の飯盛霊園にある。幼い頃から暇な休日があると、祖父母宅に行き、祖父母を車に乗せてお墓参りに行っていた。お墓を洗ったり、お花を供えたり、手を合わせたり。だが私が中学生に上がると、お墓参りにいることもなくなった。三姉妹なので墓終いをしようと父が考えているらしい。